episode.09

厳しい自然の中で育まれた漁の技

話し手 三島村議会議員 民宿経営
山田 和広（やまだ かずひろ）さん （昭和38年10月10日生）

聞き手 三島村立 三島片泊学園
9年

漁師になったきっかけ

私は現在漁師をしながら民宿を経営し、議員活動も行っています。生まれも育ちも黒島の片泊です。黒島には高校がないため、中学校を卒業したら島外に出て行かないといけないのが現実ですね。私も一度は出ましたが、黒島が好きで帰ってきました。元々食べるために魚を捕っていたので、島に帰ってからも魚を捕り始めたのが、漁師になったきっかけです。最初はイセエビ漁で、その頃はたくさん捕れて値段も良く、漁師になるとすぐにお金が稼げました。当時は小さな手こぎボートから始め、少しずつお金をためて徐々に船を大きくしていきました。

魚と向き合う、道具づくりの原点

今は何でもネットや釣具屋で手に入りますが、昔はそういうものがありませんでした。島にある竹を切って竿を作っていました。仕掛けやエギ（疑似餌）などはすべて手作り。エギは小魚に見えるようにしないといけません。そこで、鶏の羽に鉛をつけて作っていました。オスの首の毛を組合わせてくるくる巻いて、動かすことで魚に見えるんです。この道具づくりがポイントで、上手に作れる人は当然魚もたくさん捕れます。

鶏の羽は輝いているものを選びます。鉛の頭も非常に輝きがありますが、島では鉛が手に入らない。そこで貝（夜光貝が一番いい）の内側を磨いて丸くして自分たちで作っていました。竿のもち手には、唐竹（マダケ）の枝の部分を使います。唐竹はちょっと取るのが大変なところにしか生えていなかったので、すぐにとれる大名竹（リュウキュウチク）を使用。曲がった竹は火であぶって伸ばして使っていました。

先人の知恵を受け継ぐ漁法

『８の字』という漁法があります。竿で８の字を書くように海の中を混ぜる。昔、漁を知らない人から「海の中を混ぜくって遊んでいる」と言われましたが、こうすることで魚が捕れるんです。混ぜることで泡ができて魚が逃げ惑うように見え、捕りたい魚が寄ってきます。スマ、カツオ、カンパチ、黒島ではイソマグロが多くて、よく釣っていました。８の字漁法は、船で行うトローリングあるいはジギングの原理を、竿でやったのが始まりです。これは片泊だけです。

魚は「まじめどき」って言われる時間帯がよく釣れます。夕方なら日がかげってから沈む間。朝は日が昇る前から昇り切るまでの薄暗い間。これが「まじめどき」で絶好の時間帯です。あと「潮時」があり、絶好の時間帯は干潮や満潮ではなく潮が動いている間、この時間に「まじめどき」が重なると、一番魚が釣れます。

漁師の醍醐味

島の近くにやって来るカンパチやブリなどは３～５Kgあります。そういう魚をねらう時は糸を丈夫にしたり、針と鉛の位置を変えたりする。この微妙な駆け引きが釣りの醍醐味です。捕る喜びといったら半端ないです。今の世の中、漁師で食べていくのは非常に厳しい。捕れた魚はなかなか売れないし、値段も安いから、生活するにはおすすめできませんが…。漁は戦い、生きたものを捕まえて食するのが漁師という仕事だと思っています。